

# ヘーゲルの「理性の狡智」と目的活動

尼 寺 義 弘

## はじめに

周知の如く、「理性の狡智」<sup>1)</sup>は人間の労働過程を特徴づけるヘーゲル独自の哲学上の概念である。ヘーゲルは一方で、概念・判断・推理という形式論理学の原理論<sup>2)</sup>を批判的に継承し、独自の論理学・弁証法の論理学を構築する<sup>3)</sup>。他方で、市民社会の経済的な発展にたえず注目し、イギリスおよびフランスの経済学に学んでいる<sup>4)</sup>。とりわけ科学・技術の応用による労働の生産力の発展に着目し、自己の哲学体系のなかにそれを積極的に位置づけようとする<sup>5)</sup>。この労働手段の理論は他の哲学者たちの追従を許さない「時代の子」としてのヘーゲルの面目躍如たる側面をなしている。

理性の狡智はかくして弁証法の論理学による労働の生産力の動力をなす労働手段の自己への血肉化、自己の理論体系への受容とみることができる。事実、イエーナ期における若きヘーゲルは、萌芽の姿であるが、主観的論理学の展開と人間の「狡智」とをたえず結びつけて論じている<sup>6)</sup>。この考え方は生涯一貫していると言ってよいであろう。

本稿は理性の狡智の完成された叙述である『大論理学』の目的論を中心として論じている。とはいえ、ヘーゲルの論理学に満ちている哲学的思弁のなかに「合理的核心」<sup>7)</sup>をとらえることはきわめて困難な理論的営為である。以下において「神秘的外皮」<sup>8)</sup>にまとわれた目的論を各パラグラフごとに検討していくことにする。

## 目的論における「理性の狡智」

「理性の狡智」は『大論理学』、第3巻「主観的論理学または概念論」、第2編「客観性」、第3章「目的論」、C「実現された目的」において論じられる。

目的論は、はじまりにあたる概観とA「主観的目的」、B「手段」、C「実現された目的」と理念への移行より構成される。以下、目的論の展開にしたがって可能なかぎり逐条的に考察することにしよう。

### 目的論の概観

目的論の概観にあたるこの部分は、はじまりからA「主観的目的」に至るまで、大小14の Paragraph からなる。以下、1～14と番号を付して各 Paragraph ごとに検討していこう<sup>9)</sup>。

1 はじめに機械論と目的論の関係について述べられる。機械論は、化学論とともに、「自然必然性」(2)のもとにあり、「客観に定立された規定性」を「外面的な規定性」とみ、「本質的にはどのような自己規定もあらわされていない」ものとみる。「概念は客観のなかに現存在しない」(2)。

目的論はこれに対して「概念の独自の、自由な現存在」、概念の活動するトポスであり、「合目的性」を生みだす自由な「悟性」の働きとみる。「自由なもの」とは自分で自分自身を規定することである。

かくして作用因と目的因との対立、「世界の絶対的本質を盲目的な自然的機械論ととらえる

べきか、あるいは目的にしたがって自分を規定する悟性ととらえるべきか」という対立、あるいは「決定論の意味をもつ宿命論と自由とのアンティノミー」も、機械論と目的論との区別と対立に関係する。かくして機械論—化学論—目的論へと展開される「客観性」は概念が自由を一步一步獲得していく過程とみることができる。

2 従来の形而上学は「機械的原因の概念と目的の概念とのいずれが即自・向自的に真理をもつかということについて究明しなかった」。ヘーゲルによれば、「客観的世界の現存在が真なるものの尺度ではなくて、真なるものこそ二つの現存在のうちどちらが客観的世界の真の現存在であるかについての基準である」。

そして機械論と目的論とを「同等の価値をもつもの」とはみないで、「目的関係が機械論の真理である」。すなわち「目的が自由な現存在のなかにある概念であり」、機械論と化学論は「概念の不自由、概念の外面性への埋没」であり、「自然必然性のもとに総括される」。

3 機械的關係および化学的關係において、客観は自分で自分自身を規定することはできない。すなわち客観は自己の規定性を「他のものによって外面的に定立された規定性」としてもつにすぎない。そして「規定を行う外面的なものは、それ自身またそれと同じ客観にすぎず、すなわち外面的に規定された客観であるとともに、またこのように規定されていることに対して無関心であるような客観にすぎない」。かくして機械論および化学論の「本質的モメント」は「外的なもの」のなかであり、その点で「有限性」の領域をこえるものではない。ここには「概念の不自由」(2)がある。とはいえ「力」、 「原因」、 「反省規定」等々の諸連関は「全体性の傾動 (Streben)」を示すものである。

4 目的論は「一つ概念を、即自・向自的に規定されたものを、したがって自己規定する

ものを前提し」、客観の多様性を内容と形式との統一においてとらえようとする。つまり概念は形式たる規定有と被規定有との区別と内容たる「自分に反省した統一」とにおいて自由に自己を規定するのである。

5 目的論はかくして「現存在のなかにある概念を、それも即自・向自的に無限者であり、絶対者であるような概念をもつ」。それゆえ目的論は自己のうちに自己を規定する概念をもつことから、それは「自由の原理」をもち「機械観の真理」をなすといえる。

6 カント目的論の意義と批判が行われる(6~13)。カントの「偉大な功績の一つは、彼が相対的あるいは外的合目的性と内的合目的性のあいだに区別をたてたことにある」。彼は内的合目的性のなかに「生命の概念、すなわち理念」を開示した。「目的論と機械論との対立は、最初は、自由と必然性というより一般的な対立である。カントはこのような形式における対立を理念の二律背反のもとで、しかも先験的理念の第三の矛盾として論じた」。

7~11 カントの二律背反——定立と反定立、そして証明——のもつ「空虚さ」が、自然法則における必然性と自由の対立として例示される。

12 ヘーゲルはカントの二律背反の「解決」をつぎのように批判する。

「カントによれば、われわれは自然のたんに経験的な法則によっては、事物の可能性についてどんな規定的原理をも先天的にはもつことができないのであるから、理性は一方の命題をも他方の命題をも証明することはできない——したがってこの二つの命題は客観的命題ではなく、主観的な格率と見なければならぬ。[カントによると]、一方では私はつねにすべての自然の出来事をたんなる自然的機械論の原理にしたがって反省しなければならないが、といっ

てこのことは私が場合によってはいくつかの自然形態をもう一つの格率、すなわち究極原因の原理にしたがって考察することをさまたげないのである。これは「理性の二律背反」ではなくて、まさにカント自身の二律背反である。かくしてヘーゲルは述べている。

「一体にこのカントの全立場を通じて、哲学的関心が要求する唯一のこと、すなわち二つの原理のうちいずれが即自・向自的に真理をもつかということの探究が不問のままに残される」。さらにこの立場にとって「原理が客観的な原理」、つまり「外面的に現存在する自然の諸規定」なのか、「主観的認識のたんなる格率」なのか、そこには何らの「区別」も立てられていない。

**13** カントによる目的論の原理の説明は以上のように「不十分」である。とはいえ、彼が「この原理に与えた位置づけはつねに注目に値する。カントは目的論の原理を反省的判断力に帰することによって、これを理性の普遍と直観の個別とを結びつける媒辞とした」。「さらにこの反省的判断力を規定的判断力と区別し、規定的判断力をもって特殊をたんに普遍のもとに包摂するものとみた。このようなたんに包摂的であるような普遍は抽象的なものであって、それは他者のなかで、すなわち特殊のなかではじめて具体的となるものである」。

目的はこれに対して「具体的普遍」、「それ自身のなかで特殊性と外面性とのモメントをもち、活動的であり、自分を自分自身から反発しようとする衝動である」。概念は本来「目的として客観的判断」であるが、それはカントの言う如き「悟性がわれわれの認識能力のために統一を与えるかのような」「反省的判断」ではない。「目的関係は客観的に判断し、外面的な客観性を絶対的に規定する、即自・向自的に存在する真なるもの」である。だから目的関係は「判断」をこえ、「客観性をとおして自分を自分自身に結合する自立的な自由の概念の推論である」。

**14** 目的論の概観にあたる1～13までの要約を行っている。

「目的は機械論と化学論とに対して第三のものであることが明らかとなった。目的は両者の真理である。目的はそれ自身なお客観性の領域内にあり、あるいは全体的な概念の直接性の領域内にあるから、それはなお外面性それ自体によって影響され、客観的世界を自分に対立させ、それに関係している。この面から言えば機械的因果性は——化学論もまた一般にこれに含まれる——外的なものとしてのこのような目的関係のうちでもなお姿をあらわすが、しかしそれは目的関係に従属したもので、即自・向自的に止揚されたものとして姿をあらわす」<sup>10)</sup>。

「客観的な過程のさきの二つの形式が〔目的関係に〕従属するという性質は、上述のことから生じる。この二つの形式の無限累進のうち存在する他のものは、最初はそれらに外面的なものとして定立されていた概念であり、これがすなわち目的である。概念がそれらの実体であるだけではなく、外面性もまたそれらにとって本質的な、それらの規定性をなすモメントである。だから、機械的な技術、あるいは化学的な技術は、外的に規定されているというその性質によっておのずから目的関係の前に姿をあらわすのである。そこでつぎに目的関係を立ち入って考察しなければならない」<sup>11)</sup>。

## A 主観的目的

**1** 目的は「自分を外面的に定立しようとする本質的な傾向または衝動」である。それは主観的概念として「自分を自分から反発し、そのことのうちに自分を保持する統一である」。主観的概念は機械論の「中心性」のなかにもまず「否定的な統一点」を定立し、化学論のなかでは「概念諸規定の客観性を定立し」、かくして「具体的な客観的概念として定立された」。

目的は内容と形式を具備した概念の自由な展開である。それは力—発現、実体—偶有性、原因—結果 という関係におけるように、概念

がはじめてそこで自分の「定有」あるいは「現実性」をもつことになる「移行」ではない。目的の「真理」は自由であり、自分の「概念を止揚する仕方」でのみ移行しうる。すなわちそれは「自分自身を発現にまで誘発する力となり、自分自身の原因としての原因となり、あるいは原因の結果がそのまま原因であるような原因、自己原因といえる。

2 悟性が合目的性の創造者として考慮されるとき、合目的性の「内容は、一般に現存在のなかにある理性的なもの」、「客観的区別をその絶対的統一のなかにもつ具体的概念」、「推理」である。すなわち内容は「自分を自分から反発する否定性をうちに含む」「普遍的な活動性」として 普遍性－特殊性－個別性 を否定的な連関において自己展開する。「この反省は一面において主観の内的普遍性であるが、他面において外に向っての反省である。その限りで目的はなお主観的なものであり、その活動性は外面的な客観性へ向けられる」。

3 「目的は客観性のなかで自分自身に到達した概念である」。目的は客観に対して理論的にどのようにそれを把握し、また実践的にどのようにそれに立ち向かうのか、そのはじまりである。はじまりはまず目的と客観との関係が「客観的な無関心性と外面性という規定性」にあるそれである。

だから目的が「直接的なもの」であるかぎり、それは「一つの規定的な内容」となり、「有限なもの」となる。目的はまた客観という「前提の形態」をもつことから有限となる。

「というのは目的は客観的な、機械的ならびに化学的な世界を自分の前にもち、目的の活動性はそういう現前に存在するものとしてこの世界に関係するものだからである」。かくして「目的の自己規定的な活動性は」「自分への反省であるとともに、それだけ外への反省である」。

つまり目的と客観性とが媒介されていずバラバラの関係にある。だから目的はまだ「客観性

がそれに対立しているかぎり、超世界的な現存在」をもつだけであり、客観はまだ「目的によって規定されず、貫徹されないところの機械的な、または化学的な全体として対立する」。

なおレーニン「技術と客観的世界。技術と目的」と題して、このパラグラフの後半から目的と客観についてのさきの二つの文章を引用している<sup>12)</sup>。

4 かくして「目的の運動は、目的の前提、すなわち客観の直接性を止揚して、客観を概念によって規定されたものとして定立することに向けられている、と言うことができる」。これは目的の「客観に対する否定的態度」であり、また「目的の主観性の止揚」である。すなわち「目的の実現」、「客観的な有と目的との合一である」。「目的はそれ自身のなかで自分の実現の衝動をもつ」。

目的はかくしてそれがまず実現されるための「手段として定立されねばならない」。ヘーゲルは手段へのこの移行を概念の自分自身の「反発 (Abstoßen)」、「開示 (Entschluß)」、「排除 (Ausschließen)」、「開現する (sich aufschließen)」などによって実現しようとする。あるいはまた主観性の「定立作用 (Setzen)」と「前提作用 (Voraussetzen)」から「概念によって規定されたものとして定立されねばならない」としている。

つまり目的の主観性は自分を規定し、自分に内容を与えるとともに、自分に「無関心な、外面的な客観性に関係し」、この客観性を主観の内面的な規定性と「同等なもの」とするのである。そのためにはまず第一に「手段」が定立されねばならないのである。

レーニンはヘーゲルのこの展開についてつぎのように述べている。

「現実人間に目的は客観的な世界によって生み出されるものであり、その世界を前提し——それを与えられたもの、現存するものとして見出す。しかし人間には彼の目的は世界の外部からとってこられたもの、世界から独立した

ものであるように見える（「自由」）。

《注意：「主観的目的」のパラグラフに述べられているすべて。注意。》<sup>13)</sup>

## B 手段

1 目的は内的な主観性としてプランをつくり、客観的世界においてプランを実現することである。この「実現の始まり」として「規定された客観こそ手段である」。

2 「目的は手段によって客観性と結合するのであり、この客観性のなかで自分自身と結合する<sup>14)</sup>。手段は推理の媒辞である。目的は有限的なものであるゆえにその実現のためにはある手段を必要とする。」

ヘーゲルは、目的—手段—客観性 の関係について、目的は客観的世界を前提するものであるから、なお「有限性」の関係とみる。かくして「手段は目的そのものと目的の実現との両方に対して無関心な外面的定有の形態をもつ媒辞である」。

目的論は既述のとおり機械論、化学論の領域を止揚し、両者の真理をなすものであるが、なお「有限性」をもち、有機的全体としていまだ完全なモメント化されてはいない。

3 したがって「手段は形式的推理の形式的媒辞である」。ここで形式論理学の推理論、たとえば、バラは赤い、赤は色である、ゆえにバラは色である、とするようなもつとも源初的な推理における媒辞「赤」のもつ意味を考察することができる。バラの一属性は「赤」である。「赤」は色の一種である。かくして バラ—赤—色 の関係は「赤」という一点で各項が結びつくもつとも貧弱な推理である。

それゆえこの推理の各項は互いに「外面的」で、互いに「無関心な」ものである。媒辞の位置は各項の無関心性からいずれもが取り得るものである。そして媒辞はその両項に対して「相対的」である。すなわち一方の項に対して「普遍」であり、他方の項に対して「個別」であ

る。

「手段」はそれが「直接的な客観」であり、目的に対して「外面的」であることから、うへの形式的推理の媒辞と同じものとみられている。とはいえ手段は目的によって生み出された客観、目的の媒介手段であり、たんなる「直接的な客観」ではない。さらに手段は目的的手段であり、けっして「外面的な関係」でもない。目的—手段—客観性 の関係は合目的なものであり、目的のもつ主観性が一貫しており、形式的な推理と比較しうべきものとはいえない<sup>15)</sup>。

4 とはいえヘーゲルによれば「概念と客観性は手段においてたんに外面的に結合されているにすぎない」。手段もしたがって「機械的客観」である。目的は普遍として手段を規定する——「包摂する」。逆に手段も機械的客観として目的を規定する。したがって目的と手段とは「一つの規定性」として関連しあうにすぎず、互いに規定しつくされるものとはなっていない。しかし媒辞である手段は「結合するものとして目的の全体性でなければならない」。目的の手段における「自分自身への反省」である。すなわち「形式的な自己関係」、自己同一化である。それは「手段の客観性」の定立であり、「純粋な主観性」としての「活動性」である。「主観的目的」の「客観化」への活動性である。「単純な概念の他者への生成」つまり二つのモメントへの分割、目的それ自体が目的と手段へと分割されることである。

5 かくして媒辞は「推理の全体性」である。目的による「客観の規定性」が客観を手段とする。目的活動は手段において自己を貫徹する。つまり手段は目的に対してはもはや「抵抗力」をもたず、「定立された概念であるところの目的によって全く貫徹されることになり、またこの目的の伝達を受け入れる」ものとなる。つまり手段は「即目的に目的と同一のものであり」、「概念によって貫徹されるものとして定立されている」のである。

「客観は目的に対しては無力であり、目的に奉仕するという性格をもつ。目的は客観の主観性または魂であり、この主観性または魂は客観のなかにその外面的な側面をもつ」。

6 「手段のなかで目的と結合されている客観性は、それがたんに直接的であるにすぎないために目的に対していまだに外面的である」。かくして「目的の活動性」は手段によってこの客観性に向けられる。

### C 実現された目的

1 目的—手段の関係において目的は「自分に反省している」。しかし客観はいまだ「規定性に対して無関心的」である。したがって目的の活動性は客観に働きかけなければならない。つまり目的は概念として客観を「規定する」。だからその成果は機械論のような手段の「無限累進」ではなく、「目的そのものの客観性」でなければならない。目的の活動性はしたがって「客観の自分自身による概念の統一への一致」、すなわち目的の「自分を媒介として規定し」、「自身を止揚する」そうした活動性でなければならない。

ヘーゲルは目的活動のこの理解においても概念の「客観的な自己還帰」、つまり思弁的把握を強調する。思弁のたえざる登場は目的活動の合理的把握を妨げることとなる。

2 「手段を介して行う外的客観に対する目的の活動性の関係は、まず推理の第二前提、つまり媒辞の他の項に対する直接的な関係である」<sup>16)</sup>。「直接的な」とは、媒辞である手段も客観であり、それと加工されるべき外的客観の関係も無媒介のそのことである。それゆえ「手段は外的客観に対して作用し、それを支配しようとする」。しかし外的客観は手段に対して媒介されていず、直接的であり、手段に対して「無関心」である。はじまりはしたがって機械的な過程あるいは化学的な過程である。

とはいえそれらの過程はいまや「目的の支配

下にある」。というのはすでに「目的がその関係の真の媒辞であり、統一であるものとして自分を証明した」ものであるから、手段が「目的の活動性を自分のなかにもつ客観」として定立されており、かくして「合目的な活動性の客観に対する否定的態度」は、「客観性のそれ自身のなかでの目的への変化であり、移行である」。

このように目的概念の客観への「活動性」あるいは「否定的態度」は客観の目的に合うような改造であり、手段による目的の客観への定立である。

3 目的—手段—客観 の関係は、一見すると、客観—客観という外的な直接的な対立として、「暴力」的なそれとして映ずることになる。だが、この関係は「目的が自分を客観との間接的な関係のなかにおき、自分と客観との間に他の客観を差し入れる (einschiebt) ということは、理性の狡智とみることができる」。「目的は客観を引き出して手段となし、自分に代わってこの客観を外から働きかけさせて、その身を疲労困ぱいさせる。しかも自分はその客観の背後にあって機械的暴力から身を守っているのである」。

ヘーゲルはここで労働者と労働手段と労働対象との熱き関係を冷静な目で分析しているといえる。つまり労働者は労働手段と労働対象を互いに否定させ合い、働き疲れさせ合って、自分を暴力から守り、しかも自分の意図した成果を手に入れるというまさに人間のもつ老獪さ、したたかさを「理性の狡智」と名づけている。

『小論理学』 (§209) においてもつぎのように述べられる。

「主観的目的は、客観的なものがそのうちで互いに磨滅し合い止揚し合うこの過程を支配する力として、自分自身はこの過程の外にありながらしかもそのうちに自分を保持している。このことが理性の狡智である。」<sup>17)</sup>

さらに同「§209の補遺」においてもつぎのように述べられる。

「理性は有力であるとともに狡智に富んでい

る。その狡智が一般にどの点にあるかと言えば、それは、自分は過程に入り込まないで、もろもろの客観をそれらの本性にしたがって互いに作用させ疲労困ぱいさせて、しかもたんに自分の目的だけを実現するという媒介的な活動にある。」<sup>18)</sup>

K.マルクスは『資本論』第1巻、第3編、第5章、第1節「労働過程」の「注2」において、上記『小論理学』(§209の補遺)を引用している。マルクスの「注2」を付した『資本論』の本文はつぎのとおりである。

「労働手段は、労働者が彼と労働対象とのあいだに差し入れて (schiebt), この対象への彼の働きかけの導体 (Leiter) として彼のために役立つ物またはいろいろな物の複合体である。労働者は、いろいろな物の機械的、物理的、化学的な性質を利用して、それらのものを、彼の目的に応じて、ほかのいろいろな物に対する力手段 (Machtmittel) として作用させる。」<sup>19)</sup>

「理性の狡智」という労働過程を特徴づける概念はすでにイェーナ期において明確につぎのように述べられている。

「自我は自己と外的な対象とのあいだに狡智を差し入れる (hineingestellt)。それは自己をいたわりそして自己の規定性をそれで保護し、道具を使い古すためである。自我はこの推理の核心であり、この道具に関しては活動性である。」<sup>20)</sup>

さらに『法の哲学』の「講義録」においてもつぎのように述べられている。

「道具はそれによって人間の活動が外的自然と媒介される媒介項を形成する。人間は他のものを外的なものに向け、それを磨滅させることによって自分自身を保持するということ、そのことが理性の精神 (Geist der Vernunft) である。」<sup>21)</sup>

4 目的は外的な客観を前提し、有限性の領域にある。手段は目的を実現するための「推理の外面的な媒辞」をなし、目的の「理性性」がこの媒辞のなかに収斂される。かくして手段は

この目的よりも「高次のもの」である。

「手段は目的の実行である推理の外面的な媒辞である。したがって目的のうちにある理性性が手段そのもののなかで、こうした外面的な他者のなかで、またまさにこうした外面性を通じて自分を保持しているものであることを示している。そのかぎりでは手段は外的な合目的性の有限な諸目的よりも高次なものである。

犁は、それによって作られ、そしてその目的であるところの直接的な享楽物であるものよりも尊い。直接的な享楽物は消え去り、忘れられるが、道具は自分を維持する<sup>22)</sup>。人間は、たとえその目的の点でむしろ外的自然に従属するにしても、自分のもついろいろな道具によって外的自然に対して支配力を有する」<sup>23)</sup>。

目的よりも手段の優位性がこのように論ぜられる。『歴史哲学』においても同様につぎのように述べられている。

「人間は種々の欲求をもって外的な自然に対して実践的な仕方である。その場合、人間は外的な自然によって自分の欲求を充足させ、そしてそれを消耗させるにあたり、媒介的に仕事に取りかかる。すなわち自然の対象は強力であり、多様な抵抗を行う。自然の対象を征服するために人間は他の自然物を差し入れて (schiebt...ein), かくして自然それ自体に対して自然をさし向け、この目的のために道具を発明する。人間のこの発明は精神に属し、そしてこの道具は自然の対象よりも高次なものと見られねばならない。」<sup>24)</sup>

マルクスも「労働過程」の分析においてつぎのように述べている。

「死滅した動物種族の体制の認識にとって遺骨の構造がもっているのと同じ重要性を、死滅した経済的社会構成体の判定にとっては労働手段の遺物がもっているのである。何がつくられるかではなくて、どのようにして、どんな労働手段でつくられるかが、いろいろな経済的時代を区別するのである。労働手段は、人間の労働力の発達の測度器であるだけでなく、労働がそのなかで行われる社会的諸関係の表示器でも

ある。]」<sup>25)</sup>

5 機械論の真理である目的は「客観とその過程に対して自由に現存在するものであり、自分自身を規定する活動性」である。それゆえ目的は機械的な客観においてもあくまで自己を貫徹する。「客観に対する目的の力は向目的に存在するこの同一性であり、そして目的の活動性はこの同一性の顕現である」。ヘーゲルは機械論のもつ外面性・無関心性とそれを止揚する目的の活動性との関連をここでも論じている。

6 「目的論的過程は明瞭に概念として現存在する概念を客観性へ翻訳することである」<sup>26)</sup>。つまり「目的論的移行においては」、たとえば、水と水蒸気の関係にみられる、原因—結果、のように、「原因が結果のなかで全く自分自身と一致する」ということだけではなく、「概念の自分自身による自分自身との一致」あるいは「この同一的なものの形式のなかに現存在する同一性」あるいは自己原因として「概念はそれ自身すでに原因として現存在するもの、客観性と客観性の外面的規定可能性とに対する絶対的な、自由な具体的統一として現存在するものである」。だから目的が「前提されている他者へ」「自己を翻訳する外面性」は、「すでにそれ自身が概念のモメントとして、概念の自分自身における区別の形式として定立されている。だから目的は外面性のなかに自分自身のモメントをもつ」。かくして目的は「その区別されたモメント」——「主観的目的、手段および媒介された活動性、そして客観的目的」において、「即自的に自分に同等であるだけでなく、自分に同等なものとして現存在もする」ということである。

7 「目的論的活動性」はしたがって「終りが始まりであり、帰結が根拠であり、結果が原因である」。さらにそれは「既成体の生成」あるいは「すでに現存在するものが現存在のなかに現れる」ということである。つまり概念の自

由なる現実体としての目的活動の実現である。したがって目的活動においては有論および本質論の対をなす「関係規定」あるいは「反省規定」が「区別を失い」、「単純な概念と同一のものとして定立されている」。

8 「目的論的活動性の生産物」と主観的目的—手段—客観 という推理形式との「外面的な」関係について論じている。客観にとって目的活動は一方では無関心的なもの、外面的なもの、機械的なものである。他方で目的にとって客観は「統一のモメント」であり、「一個の全体」、「具体的統一」でもある。かくして「この合目的な活動性の生産物のなかでは目的の内容と客観の内容とが外面的な」関係にある。つまり両者は一致していず無関心な面、ズレがある。

ところで、「合目的な活動性の生産物」は形式的な推理論、大前提—小前提—結論 において「結論」にあたる。この「生産物」と同様に、「結合する媒辞のなかでは合目的な活動性と手段である客観とが、また他の一項である主観的目的のなかでは概念の全体性としての無限の形式と概念の内容とが同じように関係し合っている」。つまり主観的目的—手段—客観におけるいずれの関係も「直接的な関係である」。かくしてこの推理は形式的推理一般と同様につきのような「欠陥」をもつ。「推理を構成する諸関係がそれ自身、結論または媒介ではないということであり、その諸関係はむしろ自分たちが手段としてその結論の産出のために役立たなければならないその当の結論をすでに前提しているということである」。

9 目的活動のもつ欠陥が形式的推理のそれと対比しながらこのパラグラフでも論ぜられる。

主観的目的はその手段（一つの客観）およびこの手段によって目的が実現される客観に対して「直接的に関係することはできない」。というのはこれらの客観はいずれも「直接的なも

の]であるからである。まず「一方の前提」である主観的目的と客観とは「異なるもの」であり、したがって「両者の関係の手段が差し入れられねばならない。しかし、この手段もまた、すでに目的によって規定された客観であり、この客観の客観性と目的論的規定との間には、新たな手段が差し入れられねばならないのであり、この関係は無限に進む。かくして媒介の無限累進が定立される」こととなる。この無限累進は、「他方の前提」である「なお無規定的な客観に対する手段の関係についても」あてはまる。「両者は全く自立的なものであるから、両者はただ第三者のなかでのみ結合されるのであって、この関係は無限に進む」。

つまり目的によって規定された客観（手段）であろうと「無規定的な客観」であろうと、ヘーゲルによれば、無限に媒介し続けなければならない客観である。客観は与えられた前提としてそれにとどまるかぎり媒介の無限性は続くこととなるのである。したがって与えられた前提それ自身を自分自身でつくり出す関係、概念の自分自身による自己媒介の関係という点からみて目的活動は「欠陥」のある、ヘーゲルにとって不満の残る関係にあるといえる。とはいえここでヘーゲルは手段の、したがって手段によって実現される客観の無限性を、媒介の無限の可能性を述べているとみることができる。つまりのちのマルクスの述べている生産力の発展——それは協業—分業—機械—へと展開されることになる——すなわち労働と労働手段と労働対象の有機的結合にもとづく無限の発展可能性を論じているとみることができるであろう。

さらにヘーゲルは目的活動の欠陥を述べている。

「両前提〔一方の前提および他方の前提〕は結論をあらかじめ前提しているので、これらの単に直接的な前提を通じて存在するようなこうした結論はまた不完全なものでしかありえない。合目的な行為の結論あるいは生産物はこの行為に外面的な目的によって規定された客観にはかならない。したがってそれは手段と同一

のものである。だから、このような生産物それ自体のなかには、ただ手段が出てくるのみであって、実現された目的は出てこない。いいかえると目的はその生産物のなかにかなる客観性をも真に獲得してはいないのである」。

「したがって外的な目的が実現したすべての客観は同様に目的の手段にすぎない。つまり目的の実現のために使用され、本質的に手段と見られねばならないものは、その規定上、磨滅させられるところの手段である。しかし実現された目的を含み、この目的の客観性として自分を表示しなければならない客観もまた過ぎ去って行くものである。すなわちこの客観もその目的を安定した、自分自身を維持する定有によって充足するものではなく、ただそれが磨滅させられるかぎりにおいて、この目的を充足するにすぎない。というのは、ただそのかぎりでのみ、その客観の外面性、すなわちその客観性が概念の統一のなかで止揚されることによって、客観は概念の統一に照応するからである」。

たとえば「家、時計」などは「その製造のために使用された道具に対しては目的とみられる」。しかし目的の実現のための手段となる石、角材、歯車、回転軸などは、たとえば「圧力」や「化学的過程」やさらには「磨滅」など、「人間の労を省いてやる」過程によってこの目的を充足する。「したがってこれらの手段は自分の使用と消耗とによってのみ、その規定を充足するのであり、自分の否定を通じてのみ、それらが正当にあるべきところに照応するのである。それらの手段はその自己規定を単に外面的にそれらにおいてもつにすぎないから、それらは積極的に目的とは結合せず、したがってそれらは単に相対的な目的にすぎず、あるいは本質的にも単に手段にすぎないのである」。

ヘーゲルは当時の機械的な過程および化学的な過程の精密な成果の一つである時計とそのための歯車、回転軸などをあげている。ヘーゲルにとっては 目的—手段—客観 の関係は、この精密な成果においてもやはり目的概念とそれが充足されるべき定有様式との一致はえられて

いず、あくまで主観的目的と客観とのあいだの断絶はうずめられてはいない。したがってここにいたっても、いまだ概念と定有とは一致せず、相対的なあるいは外面的な一致しかえられてはいないのである。

あるいはつぎのように言うことができるであろう。客観はそれが規定されたもの(手段)であれ、無規定なもの(材料)であれ、いずれも所与のもの、あるいは、前提されたものである。目的—手段—客観 という「客観」の最高の関係においても、ヘーゲルにとってこの所与性、前提性は残らざるをえない。この所与性、前提性を止揚し、それらを自分自身で媒介し、自分自身で生み出す有機的な、あるいは、弁証法的な活動を志向するヘーゲルにとっては、目的活動は不満の残るものとなっている。

**10** 以上のように、外的な合目的性は「ある制限された内容」をもち、その内容は「概念の無限の自己規定」としての「形式」に照応せず、「真理」たりえない。目的は既述の如く「生成と変化に晒され、過ぎ去っていくものである」。

目的活動に対するヘーゲルの考え方には、それが、たとえば「生命」のように、主観と客観との一致あるいは概念と定有との一致の体系、つまり自分自身で自分の存在様式それ自体を媒介する、あるいは、生産するという有機的な生命活動からみて、より低次のもの、より不十分なものとする見方がある。

**11** このパラグラフよりヘーゲルは目的論全体をまとめ、つぎの第3篇「理念」への移行を説こうとする。それは目的論が概念の実現として不充分であること、その欠陥を更めて論ずることである。

主観的目的が客観を前提し、「外的な、主観的な規定にとどまる」かぎり、外的な合目的性は主観と客観との統一としての、概念としての「客観的な目的〔生命〕」とはなりえない。主観的目的が手段を通じて実現されるとしても、手

段は手段としてあくまで客観にとどまるものであり、主観的目的は「直接に」客観性に「埋没しており」、さらに「目的の実現がまえもってすでに必要とされる」ことから、目的ははまだ手段にまで達しているとはいえないのである。

ヘーゲルはこのように目的論の限界を指摘し、次篇へ移行しようとする。しかし上述の論究は難解さをともなう思弁にみちたものであり、けっして合理的なものとはいえない。

**12** 客観的目的は主観的目的の前提である「客観の自立的な外面性」を「非本質的な仮象として定立し、そしてそれを即自・向自的にもすでに止揚する」。「最初の客観は伝達によって手段となる」。すなわち客観は「目的そのもののなかで目的自身のモメントとして」定立される。かくして「主観的目的にとって、客観を手段とするために、いかなる暴力(Gewalt)も必要ではないし、自分自身の強化(Bekräftigung)以外には客観に対していかなる強化も要しない」。客観は目的に従属し、「即自向自有」としての「空無性」においてある。つまり客観は目的活動の自由自在な規定をうけとるものである。

**13** 目的—手段—実現された目的 という関係において、目的は「最初の直接性の止揚」、すなわち客観性の「第一の止揚」として手段は「目的そのものの実在性」であり、「客観性の第二の止揚」は「単に定立されたものとしての客観的なもの〔手段〕と直接的なもの、両者の止揚」であり、それは「実現された目的」、「生産物」である。これはまた「否定性」の媒介による目的概念の自分自身への復帰の、目的と同一的なものとしての「客観性の再生」の過程である。かくして「手段は実現された目的のなかで消失する」。つまり媒介作用は消失し、あとに何らの痕跡をも残さないのである。

**14** 主観による客観の媒介と媒介の止揚はつぎのことを含意する。「実現された目的は手

段でもあり、また逆に手段の真理は実在的な目的そのものである」。したがって「客観性の第一の止揚」と「第二の止揚」とは相互媒介の関係にある。すなわち 目的—手段 による客観の第一の否定は、手段—実現された目的 による客観の第二の否定を含み、逆に第二の否定は第一の否定を含むものである。まさに「概念は自分を規定する」のである。すなわち「前提された客観の概念の下への包摂」は、さらに「止揚されたものとして定立された外面性の規定性の止揚」と「客観の前提の止揚」へとすすむのである。

15 概念の「自己規定」は外面的な客観性の形式をとる。この「客観化」は各モメントごとに媒介される。「各モメントがそれ自身その推理の全体である」。概念の「自己反発的な統一、すなわち目的とこの目的の客観化への傾動」は、「外面的な客観の直接的な定立または前提」である。それは「目的の客観のなかでの自己媒介」つまり「手段としての客観の規定」である。さらに「客観による客観の止揚」つまり「手段の止揚」、「第二の止揚」、実現された目的である。

「有限的概念の主観性は手段を卑しめて放棄する」。だが目的は手段においてこそその優位性が「獲得される」。「目的が手段において獲得し、実現された目的において手段と媒介とを保存するという反省こそが、外面的な目的関係の最後の成果であり、そこでは目的関係そのものが止揚されており、その成果を目的関係の真理として表現している」。

かくして推理論からみて、目的論を先行する機械論および化学論と比較するならば、「第三の推理〔有機的な推理〕」が「先行の両推理の主観的目的活動であり、しかも外面的な客観性の止揚であり、したがって外面性一般の自分自身による止揚であり、かくしてこの推理が外面性の被定立有における全体性である」。つまりこの推理は目的概念が自分自身を自己反発し、客観性において客観が客観自身を自己止揚して

いく有機的全体としての推理論といえる。あるいはまた前提から結論へという形式的な推理の止揚として、自己原因として目的論が描かれているとあってよい。とはいえきわめて難解である。

16 第3章「目的論」の末尾のパラグラフであり、概念の理念への移行を述べている。すなわち第一篇「主観性」、第二篇「客観性」、そして両者の統一としての第三篇「理念」への移行をなしている。

「概念はこの客観性のなかで規定されて、概念の特殊性が外面的な客観性であることになった」。つまり概念の自己規定による客観の把握である。しかし「目的の運動は、今や、外面性というモメントがたんに概念のうちに定立されているだけでなく、つまり目的はたんに為と傾動であるだけではなくて、具体的全体性として直接的な客観性と同一であるということに到達した」<sup>27)</sup>。つまり「この同一性」は「単純な概念」であり、しかも「自分自身を止揚する媒介としての媒介」である。概念は今や「外面的な全体性」のなかで「自己を規定する同一性」である。概念はここに主観性と客観性の統一としての「理念」である<sup>28)</sup>。かくして「理念は十全な概念であり、客観的な真理であり、あるいは真なるものそのものである」<sup>29)</sup>。

## むすび

以上のように、われわれはヘーゲルの目的論について各パラグラフごとに逐条的に検討を加えてきた。その難解さゆえに理解不能なところも少くないが、合理的な核心の把握ということをつたえず心がけてきた。

まず第一に言えることは、ヘーゲルがこの目的論においても、普遍—特殊—個別 という独自の弁証法的方法を首尾一貫させていることである。主観的目的—手段—実現された目的 という三項関係に対象を定立し、その対象となるレベルに応じてであるが、この方法を適応し

ている。

第二に、人間の目的活動について全体的な哲学的考察を加えていることである。それは経済学では「労働過程」の分析といえるが、「理性の狡智」という卓越した思想にもとづく洞察である。

第三に、道具＝労働手段の富の生産および消費における優位性の強調である。この考え方もギリシア古典以来の伝統ということであるが、経済学の生誕という歴史の流れからみてきわめて新鮮である。

### 注

- 1) 「理性の狡智」(List der Vernunft) は、ヘーゲルの思想を特徴づける独自の考え方である。それは大きく言って二つある。一つは『歴史哲学』の世界精神の果たす役割のそれである。世界史の過程は、たとえばアレクサンドロスやカエサルやナポレオンなどに代表される世界史的個人の情熱や戦いによって実現される。世界精神は野心をもつ個人の情熱を互いに戦い合わせ、傷つけ合わせて、しかも自由なる理念である自己を実現していく。世界精神はこれらの過程の背後にあって、何ら自分を損うことなくあたかも「神の摂理」の如きものとしてこの過程を行うのである。

Vgl.G.W.F.Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, In : G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke12, Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1970. S.49.武市健人訳『歴史哲学』上巻, 岩波書店, 1974年, 62ページ, 参照。

もう一つは『大論理学』の「目的論」の理性の狡智である。つまり主観的目的が自分と客観とのあいだに、「手段」を差し入れ、手段という客観と外的な対象である客観、という二つの客観を互いに作用させ合い、働き疲れさせ合って、しかも主観的目的自身はこの過程のそとにあって何ら傷つくことなく、自分の目的物を獲得するということである。人間の労働過程を鋭くこの哲学者は分析していると言ってよい。本稿はこの目的論の論究を行うものである。

Vgl.G.W.F.Hegel, Wissenschaft der Logik, II, In :

G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke6, Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1969. S.452.武市健人訳『大論理学』下巻, 岩波書店, 1962年, 244ページ, 参照。

ヘーゲルはこの二つの考え方を明確に区別して論じているわけではない。『エンチクロペディー』(§209補遺)では、むしろ同じ思想の二つのヴァリエーションとみている。つまり「神の摂理」あるいは「神の意図」の「絶対の狡智」としての行いと「理性の狡智」としての行いとは直接結びついているのである。

Vgl.G.W.F.Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften, I, In : G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke8, Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1970. S.365.松村一人訳『小論理学』(下), 岩波文庫, 1978, 204ページ, 参照。

本稿作成にあたり当該のヘーゲルの文献とともにつぎの文献の「理性の狡智(詭計・術策)」の項を参照した。

林達夫ほか監修『哲学事典』平凡社, 1988年。

岩佐茂ほか編『ヘーゲル用語事典』未来社, 1991年。

加藤尚武ほか編集『ヘーゲル事典』弘文堂, 1992年。

牧野広義『人間と倫理』青木書店, 1987年。

佐藤康邦『ヘーゲルと目的論』昭和堂, 1991年。

- 2) 速水滉『論理学』岩波書店, 1967年, 21ページ以下参照。

- 3) 見田石介『ヘーゲル大論理学研究』第1, 第2, 第3巻, 大月書店, 1979~80年。

ヘーゲル論理学研究会編『ヘーゲル大論理学 概念論の研究』大月書店, 1991年。

- 4) ヘーゲルの経済学研究については、『法の哲学』の「欲求の体系」の経済分析や『イェーナ精神哲学』の「現実的精神」のそれを参照されたい。

G.W.F.Hegel, Grundlinien der Philosophie des Rechts, In : G.W.F.Hegel Werke in zwanzig Bänden, Werke7, Suhrkamp, Frankfurt a.M. 1970. S.346ff.藤野涉・赤澤正敏訳『法の哲学』・世界の名著35『ヘーゲル』所収, 中央公論社, 1967年, 421ページ以下参照。

G.W.F.Hegel, Jenaer Realphilosophie, Vorlesungsmanuskripte zur Philosophie der Natur und des Geistes von 1805-1806, hrsg.v.Johannes Hoffmeister, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1969, S.213ff.

拙訳『イエーナ精神哲学』見洋書店, 1994年, 53ページ以下参照。

拙稿「ヘーゲル《法の哲学》の「欲求の体系」の経済分析」『阪南論集 社会科学編』, 第34巻第3号所収, 1999年, 参照。

- 5) ヘーゲル『大論理学』の「客観性」は機械論—化学論—目的論として展開される。ヘーゲルは当時の科学技術の成果を自己の哲学体系なかんずく論理学のなかへ積極的に取り込んでいる。
- 6) Hegel, Jenaer Realphilosophie, S.194ff.拙訳『イエーナ精神哲学』, 17ページ以下参照。
- 7), 8) K.Marx, Das Kapital, Bd. I, : Marx/Engels Werke, Bd.23., Dietz Verlag Berlin, 1962. S.27.
- 9) 引用「～」は、同一の Paragraph から行っている。別の Paragraph から引用する場合は、「～」のあとに引用した Paragraph の番号を付している。引用が多岐にわたり、かつ繰り返すことも多いため引用符は逐一つけていないところもある。なお強調符は引用者のものである。
- 10) レーニン以上は以上の引用に対してつぎのような摘要を行っている。

「 弁証法的唯物論

外界すなわち自然の諸法則、それらが機械的法則と化学的法則とに分かれていること（これは非常に重要である）は、人間の目的にしたがった活動の基礎である。

人間はその実践的活動にあたって自分の前に客観の世界をもち、それに依存し、それによって自分の活動をきめる。

この面から、すなわち人間の実践的な（目的を実現しようとする）活動の面からみれば、世界（自然）の機械的（および化学的）因果性は、外的なもの、第二次的なもの、おおい隠されたものとして現れる。」

W.I.Lenin, Konspekt zu Hegels "Wissenschaft der Logik", In : W.I.Lenin Werke, Bd.38., Dietz Verlag Berlin 1981, S.177-178.松村一人訳『哲学ノート』第

一分冊, 岩波文庫, 1964年, 169ページ。

- 11) レーニンはこの引用に対してつぎのような摘要を行っている。

「客観的な過程の二つの形式、自然（機械的および化学的な自然）と人間の目的を実現する活動。この二つの形式の相互関係。人間の諸目的は最初は自然にたいして縁のないもの（「他のもの」）のように見える。人間の意識や科学（「概念」）は、自然の本質、実体を反映するが、同時にこの意識は自然にたいして外的なものである（すぐにはそして簡単には自然と一致しない）。

機械的および化学的技術が人間の目的に真に役立つのは、技術の性格（本質）が外的条件（自然法則）によって規定されているからにはかならない。」

Ebenda, S.178. 同訳書, 169-170ページ。

- 12) Ebenda, S.179. 同訳書, 170ページ。
- 13), 14) Ebenda, S.179. 同訳書, 171ページ。
- 15) 拙稿「ヘーゲルの推理論」, 拙著『ヘーゲル推理論とマルクス価値形態論』見洋書房, 1992年, 第1章所収, 参照。
- 16) ここで述べられる「推理の第二前提」は、目的—手段—客観 という三項関係における手段—客観の関係である。つまり目的が手段を通して客観に働きかけ、客観を自己の意のままに造りかえる過程である。

第二前提に対して第一前提は、すでにみた目的それ自体が客観に働きかけて、手段を作り出す過程である。ヘーゲルはここでも全く推理論に従っているといつてよい。

- 17), 18) Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften I, S.365.『小論理学』下巻, 203-204ページ。

『小論理学』はこの引用につづけて、§209の「補遺」で、「神の摂理」にもとづく「絶対の狡智」についてつぎのように述べている。

「この意味で、神の摂理は世界とその過程とにたいして絶対的な狡智として振舞っているということができる。神はさまざまな特殊な激情や関心を持っている人々を好きようにさせておく。しかしその結果生じてくるものは神の意図の実現で

あって、それは神が手段として用いている人々が最初求めていたものとは別のものである。」

Ebenda, 同訳書, 204ページ。

「神の意図の実現」として「理性の狡智」をみる世界史把握の視点は『歴史哲学』において如実にみることができる。つぎの文献を参照されたい。

Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, S.49. 武市訳『歴史哲学』上巻, 62ページ。

- 19) K.Marx, Das Kapital, Bd. I. Werke. Bd.23.S.194.
- 20) Hegel, Jenaer Realphilosophie, S.198. 拙訳『イェーナ精神哲学』, 22ページ。
- 21) G.W.F.Hegel, Philosophie des Rechts, Die Vorlesung von 1819/20 in einer Nachschrift, hrsg.v.Dieter Henrich, Suhrkamp Verlag, 1983.S.159.
- 22) レーニンはこの引用部分につき「ヘーゲルにおける唯物史観の萌芽」と記している。  
Lenin, Konspekt zu Hegels "Wissenschaft der Logik", S.180. 松村訳『哲学ノート』第一分冊, 172ページ。
- 23) レーニンはこの短い文言について「ヘーゲルと唯物史観」と強調し、そして「注意」と記している。レーニンはさらにつぎのように摘要する。  
「ヘーゲルのうちに萌芽の状態で存在している種子、天才的な諸思想を応用し、発展させたものの一つとしての、唯物史観。」  
Ebenda, 同訳書, 同ページ。
- 24) Hegel, Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte, S.295. 武市訳『歴史哲学』下巻, 26ページ。  
レーニンもこの部分について「ヘーゲルには唯物史観の萌芽がある」としている。  
Lenin, Konspekt zu Hegels "Vorlesungen über die Philosophie der Geschichte," In: W.I.Lenin Werke, Bd.38.S.301-302. 松村訳『哲学ノート』第二分冊, 28ページ。
- 25) K.Marx, Das Kapital, Bd.I.S.194-195.
- 26) レーニンはこの文言の引用につづいて「論理学の諸カテゴリーと人間の実践」としてつぎのように

摘要している。

「ヘーゲルは、人間の合目的な活動が“推理”であるとか、主体（人間）が“推理”の“格”において或る一つの“項”の役割を演ずるなどと言って、人間の合目的な活動を論理学のカテゴリーに入れようと努力している——のみならずしばしばこれに全力を傾注している——が、これは単なるこじつけでもなければ、単なる遊戯でもない。ここは非常に深い、まったく唯物論的な内容がある。[ヘーゲルの言っていることを] ひっくりかえさなければならぬ：[すなわち、] 人間の実践的活動は、何十億回となく、人間の意識をしてさまざまな論理学上の格を反復させたにちがいがなく、こうしてこれらの格は公理という意義を獲得することができたのである。このことに注意せよ。」

Lenin, Konspekt zu Hegels "Wissenschaft der Logik", S.180-181. 松村訳『哲学ノート』第一分冊, 173ページ。

- 27) レーニンはこの文言を引用し、「注意」と記している。  
Ebenda, S.181. 同訳書, 174ページ。
- 28) レーニンは第二編「客観性」の終わりで「主観的な概念および主観的な目的から客観的な真理へ」として、つぎのような摘要を行っている。  
「注目すべきこと：概念と客観との合致としての“理念”へ、真理としての理念へ、ヘーゲルは人間の実践的な、合目的な活動を通じて接近している。[これは] 人間が自己の実践によってその観念、概念、知識、科学の客観的な正しさを証明するという思想にぴったりと接近していることだ。」  
Ebenda, S.181. 同訳書, 174ページ。
- 29) Hegel, Wissenschaft der Logik, II, S.462. 武市訳『大論理学』下巻, 257ページ。

### 〔付 記〕

本稿は、1998年度阪南大学産業経済研究所共同研究「人間らしい生活と社会」の成果報告の一部である。

(1999年1月8日受理)